2019年度国立天文台研究集会開催報告書

2020年　1月　23日

国立天文台長　殿

<table>
<tr><td rowspan="2">代表者</td><td>氏　名</td><td>（ふりがな）おおすが　けん
大須賀　健</td></tr>
<tr><td>所属・職</td><td>筑波大学計算科学研究センター・教授</td></tr>
<tr><td>研究集会名</td><td colspan="2">第32回 理論天文学宇宙物理学懇談会シンポジウム</td></tr>
<tr><td>開催期間</td><td colspan="2">2019年　12　月　25　日　～　2019年　12　月　27　日</td></tr>
<tr><td>開催場所</td><td colspan="2">国立天文台　三鷹キャンパス</td></tr>
<tr><td>参加人数・国数
(国数は所属機関の国数)</td><td colspan="2">２１０人・４カ国</td></tr>
<tr><td>発表資料等
の情報</td><td colspan="2">https://sci.nao.ac.jp/workshops/rironkon19/index.html
研究集会のプログラムや発表資料等をまとめたHPがあればURLを記載してください。
提出後に作成された場合もご連絡ください。国立天文台研究交流委員会ＨＰにリンクを張らせていただきます。HPではなく、論文や冊子を作成している場合は、可能であれば一部ご提供ください。（論文の場合はDOIの情報でも可）</td></tr>
<tr><td>研究集会の概要</td><td colspan="2">昨今の天文学・宇宙物理学は，大規模な装置による詳細な観測や大型計算機を駆使した精緻な理論計算によって急速に発展し，今世紀初頭の時点では予想もできなかった事実が次々と解明されてきている．こうした飛躍的な進歩は，次世代のプロジェクトによってますます加速されると期待される．そこで、天文学・宇宙物理学の過去の発展を俯瞰することで新たな成果の意義について精査し，未解決課題と新たな課題，そして新時代の理論研究が目指すべき方向性について議論することを目的とし、本シンポジウムを開催した．

具体的には、宇宙論、銀河、星、惑星、ブラックホール、重力波、トランジェント天体、ニュートリノ天文学、大規模数値計算の専門家数名による基調講演を行った。また、若手中心の一般講演も適宜組み込み、より踏み込んだ議論を行った。今年度に博士号を取得予定の大学院生には最優先で講演機会を与えた。多数の一般ポスター発表も行った。</td></tr>
</table>

研究集会の成果	基調講演のリストは以下のとおりである。 銀河/銀河核：井上昭雄氏（早稲田大）、和田桂一氏（鹿児島大） ブラックホール：永井洋氏（国立天文台）、川島朋尚氏（国立天文台） ニュートリノ：堀内俊作氏（ヴァージニア工科大） 星・惑星（１）：須佐元氏（甲南大）、坂井南美氏（理研） 星・惑星（２）：奥住聡氏（東工大）、関根康人氏（東工大） 宇宙論：松原隆彦氏（KEK） 重力波：道村唯太氏（東大）、藤田龍一氏（京大） トランジェント天体：諸隈智貴氏（東大） 大規模数値計算：吉田直紀氏（東大） これらの基調講演を軸に、これまでの研究成果を俯瞰しつつ、次世代のプロジェクトによってもたらされると期待される新たな成果について、深く議論することができた。各研究者が、より明確な将来象と広い視野を持って研究を発展させる礎となったという点が、本研究会の重大な成果である。 また、各研究者自身が専門としている分野にとらわれず、天文学全体の最新の動向を知ることができたことも本研究会の成果である。天文学会のパラレルセッション化が進んでいる今日、このように幅広い分野を包括する議論が行えたことは大変有意義なことであった。
その他参考となる事項（希望事項も含む）	